特集 雨森芳洲と朝鮮通信使の通った道

最近、韓国がとても近い。
それは距離的なものだけでなく、暮らしのなかの遠近感としても、である。
旅行サイトを見れば、数万円で気軽に韓国旅行と喧伝し、テレビをつければ、かの国のイケメンたちが歌ってそんな身近になった隣国だけどわたしたちはどれだけのことを知っているだろう。
諸外国との交流が少なかった江戸時代、朝鮮国からの使節団が日本列島を縦断したこと、そのために2国間を奔走した日本人がいたこと、また、彼らが来訪したのは何のためだったのか。
今号は、対馬藩の儒者として生涯を捧げた湖北出身の雨森芳洲と朝鮮通信使がたどった近江の道を辿った。
これからも、真に近くて親しい国であるために。

総説1 湖北出自の先覚者 雨森芳洲

上田 正昭（京都大学名誉教授）

江戸時代を「鎖国」の時代とみなす誤れる「鎖国史観」は、いまもなお根強いが、寛永12年（1635）5月の日本人の海外渡航禁止などの通達を「鎖国令」とよんだり、寛永16年7月のポルトガル船の来航禁止の通告とその帰国をもって「鎖国の完成」とみなす見解を支持するわけにはいかない。まず第一にその通達や通告に「鎖国」という用語は一切使われていないし、当時これを「鎖国」と表現した例もない。

そもそも「鎖国」という言葉を使用したのは、長崎の通詞（通訳）であった志筑忠雄が、エンゲルベルト・ケンペルの『日本誌』のなかの一章を「鎖国論」と題したのにはじまる。実際にオランダや清（中国）との間では交易があり、朝鮮や琉球とは通商ばかりでなく外交関係もくりひろげられていた。したがって徳川幕府の文書や記録でも前者を「通商の国」、後者を「通信の国」と記すのである。

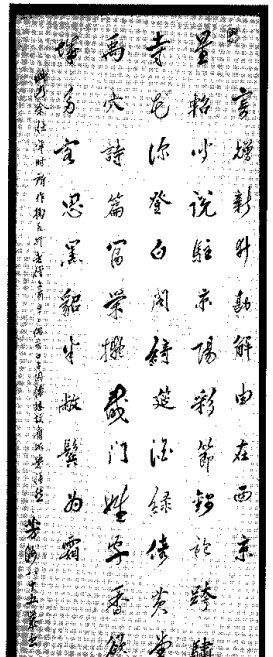
朝鮮王朝の修交のプロセスにあってもっとも注目すべき人物の一人に雨森芳洲がいる。雨森芳洲（東五郎）は、湖北高月町雨森の出身で、寛文8年（1668）に生まれて、88歳に及び、すぐれた数多くの業績を残した。

すでに泉澄一氏が論証されているように、芳洲の生涯は対馬藩の奥勤の儒者であった。22歳の時に対馬藩に仕えることとなり、26歳のおりに対馬に赴任し、31歳で朝鮮御用支配方（朝鮮方）の佐役（補佐役）を兼任したが、この朝鮮方とは、幕府・他藩や朝鮮にかんする書状や文書を扱う表札方や表向諸役の書状や文書を扱う表書札方とは異なり、朝鮮王朝との通交にかかわる故事先例あるいは慣例などを項目別に分けて書抜帳を作成することを主たる任務とした役職であった。朝鮮方であるから直接に朝鮮王朝との外交を担当したと速断するわけにはいかない。

芳洲は、第8次（正徳元年）、第9次（享保4年）の朝鮮通信使来日のおりには、対馬から江戸へ、江戸から対馬へと、真文役として通信使に同行して活躍したが、第9次の製述官であった申維翰が、芳洲を「記室」として

Profile●うえだ まさあき
1927年兵庫県生まれ。京都大学名誉教授。朝鮮通信使縁地連絡協議会顧問。高麗美術館館長

▲木下順庵肖像画（画者不詳。芳洲会所蔵）。芳洲は18歳のころ順庵に入門。300人ほどの門下生のなかには、新井白石、室鳩巣、祇園南海などがいた

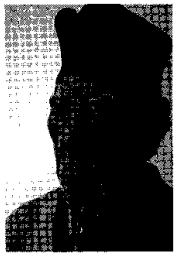


▲「寄贈新井勘解由在西京」（雨森芳洲筆。芳洲会所蔵）。芳洲が、同じ木下順庵門下として交流のあった新井白石に贈った詩

芳洲さんといっしょにまちづくり

高月町雨森区

雨森芳洲が生まれた高月町雨森の集落は、美しいまちづくりで全国的に知られるが、その根幹をなすのは芳洲さんの精神だ。その生家跡に建つ雨森芳洲庵を訪ねた。



▲朝鮮通信使の製述官・申維翰から贈られたと伝える頭巾を被る芳洲さんの像（撮影／片山通夫）

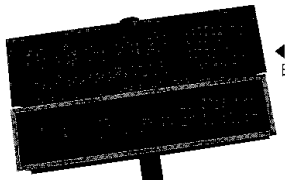
発掘された郷土の偉人

雨森芳洲のことを、出生地である高月町はともかく、〝歴史〟といえばとかく戦国時代が浮き彫りにされる湖北において、郷土の偉人として意識する機会は今までほとんどなかったと思う。その名が広く国民に知られることとなったきっかけは、平成2年、日本を訪れた韓国の盧泰愚大統領（当時）が、芳洲の誠意と信義の交わりを讃え、彼は韓国において今も賞賛される日本人の一人であると述べたことだ。その後、平成14年に訪韓した小泉総理大臣も、そのスピーチのなかで、朝鮮通信使の対応につとめた芳洲を取りあげ、朝鮮の言葉を修得し歴史や風俗を学ぶなかで、それぞれの民族がもつ文化を深く知って尊んだ、そういう芳洲の姿勢こそ今日のわれわれが学ぶべきと語っている。

雨森というまちの名は、湖北の多くの人が知っていたが、そのころになってようやく、雨森出身の芳洲という人物が対馬で活躍したことが認知されるようになった。

そもそも雨森区で芳洲を顕彰するようになったのは、大正9年（1920）のこと。子どもたちの誇りとなる郷土の偉人を調べていた、当時の富永尋常高等小学校の藤田仁平校長の目にとまったのが、対馬藩で隣国との友好的な国交に尽力した芳洲だった。大正13年には、その偉業を顕彰するため伊香郡を中心に「芳洲会」が設立され、芳洲に関する資料が集められた。それらはその後、村の保育園の片隅に建つ蔵に保存されていたが、地元の元教師吉田達さんによって地道に整理され「芳洲文庫」と呼ばれるようになった。その後、今号で巻頭エッセイを書いてくださった鈴木ゆみさんの父である松村一雄さんも雨森に通い、昭和43年ごろからは、芳洲についてご寄稿くださった上田正昭さんも熱心に研究を続けてこられた。

「そんな先人たちの苦労が今花を咲かせていると思います」と語るのは、雨森芳洲庵の館長を務める平井茂彦さん。「保育園時代は、朝来たときと帰るとき、芳洲先生に挨拶をするのが日課でした」という雨森育ちだ。



◀雨森集落に近づくと日本語とハングルが刻まれた案内板が目に入る

▲芳洲保育園時代の芳洲庵の門。奥に遊具が見える（写真提供／芳洲会）

「アジアが見える」交流ハウス

昭和59年、区の熱意に動かされた町は、芳洲を顕彰し関係資料を紹介する場として東アジア交流ハウス「雨森芳洲庵」を生家跡に建設。「湖北の村からアジアが見える」というキャッチコピーの通り、翌年から毎年、韓国から修学旅行の子どもたちが訪れるようになり、まちを挙げての交流の場となった。

しかし、いくらまちづくり先進地の雨森といえど、スタート当初は〝韓国アレルギー〟がまったくなかったわけではない。通じない言葉、とくに年配者の心に影を落とす戦争の思い出、朝鮮の人を軽んじていた時代の後ろめたさなどがないまぜになったものだったのだろうか。それは日本の他の地域と変わりなかった。

しかし、少しずつ交わりの面が広がっていくにつれ違和感は薄れていった。修学旅行生のホームステイ、富永小学校と釜山の蓬莱小学校との姉妹校縁組、釜山のロータリークラブとの提携、さらに、小学生の女の子たちによる「サムルノリ」チームの結成。「サムルノリ」とは、サムル＝4、ノリ＝楽器、つまり鉦、太鼓など4種類の楽器を使った韓国の民俗芸能で、元々は豊作を喜ぶ農業の祭りに演奏されたという。

「民族衣装を身につけてサムルノリを演じる子どもたちの姿に、みなさんの氷の壁が溶けていくようでした」と平井さんは交流の流れを振り返る。

大阪市で開催される「四天王寺ワッソ」は、古代、朝鮮半島から文化が渡ってきたころの雅やかな国際交流の様子を再現するお祭り。色鮮やかな衣装や賑やかな楽隊などは、江戸時代の朝鮮通信使の行列を彷彿させる。雨森でのサムルノリの練習は、10年ほど前、雨森の人たちがこの行列に仮装して参加したことがきっかけで始まった。指導したのは、関西興業銀行（当時）の女子行員たちだった。

現在は、修学旅行生のホームステイはなくなったが、高月町を中心に湖北地域の15世帯がホストファミリーとなって、夏休み、青年団を迎えている。自治会が受け入れを主催する例は珍しいなかで、今までに約2300人が来訪。ホストファミリーのなかには、新幹線の車中で拾った財布の持ち主が韓国人だったことからハングルに興味を持ち、習いに行ったという人もあるという。

「芳洲さんは、雨森のまちづくりにも大きな影響を与えてくれました。そして、〝友好〟という今後のテーマも…」

芳洲の子孫は、明治時代、東京に転居した。対馬は芳洲にとって生涯の大半を過ごした地ではあったが、「対馬では、江戸から仕事のために赴任してきた人という存在だったのでしょう」と、平井さんは言う。「子孫の方が東京に住んでおられることで、かえって雨森では〝みんなの芳洲さん〟になり、まちづくりの対象になったと思うんです」

今日も静かに水が流れる雨森のまち。幾度も対馬と江戸を行き来した芳洲が、びわ湖のそばを通るとき、この故郷に思いを馳せることがなかったはずはない。しかし、『海游録』の詳細な記述のなかに、そのような場面は見つからない。もし、同行した製述官の申維翰が、芳洲のふるさとが湖北にあることを知っていたなら、湖畔を北上する芳洲の視線の先をそっと追っていただろう。故郷を離れた後の芳洲は、一度も雨森の土を踏むことがなかったという。

（らん）

▲「芳洲さんの教えをたくさんの人に知ってもらいたい」と、さまざまなアイデアを生み出している雨森芳洲庵館長の平井茂彦さん

▲芳洲庵の庭園の奥に祀られる芳洲神社

▲朝鮮通信使についても深く学べる芳洲庵内部。関係書籍や、平井さんが作成したカルタ、トランプなどのグッズも並ぶ

東アジア交流ハウス雨森芳洲庵
〒529-0222　伊香郡高月町雨森1166
tel&fax 0749-85-5095
入館料：250円（20名以上の団体200円）
中学生以下無料
開館時間：9時～16時
休館日：月曜、火曜、祝日の翌日、年末年始